

高木兼寛の東京都市計画案

—— 森鷗外（林太郎）の批判を中心に ——

高木兼寛は若き日、東京都市計画に関する論文を発表した。衛生学を基礎にした先駆的なものであったため大きい反響があった。しかし森鷗外（林太郎）をはじめ幾人かの人から強い批判をうけた。そしてある意味ではその批判は現在までまだ続いている。本小論は高木兼寛側から書かれた反批判ないし弁護といったものである。

1. 都市計画と衛生学

明治維新は一つの文化革命であったといわれる。このときから文明開化が始まる。幕藩体制を崩し、西欧文明を手本にして（資本主義を取り入れ）、日本文明を急速に西欧なみに開化させようというのである（文明開化とは福沢諭吉の civilization の訳語であるというが、現在の我々にはむしろこれに近い近代化のほうが分かりやすい）。

この日本を近代化して西欧と対等にしたい、そして民族の独立を守りたい、というのが当時の政府、国民の共通な願望であった。自由民権の先頭にあった中江兆民でさえ、自分の目的は「東洋の中に一個の巖然たるヨーロッパ的島国を現出することである」といっていた程である。そして福沢諭吉の「脱亜論」（アジアを脱して西欧化すべしという論）もこれに近いものとして理解できる。いずれも明治維新の基本的性格を示すものと考えてよいであろう。

維新政府には近代化を急ぐもう一つの理由があった。それは幕末に先進諸国と結んだ不平等通商条約を何とか平等な形に改定したい、そのためには急

いで西欧の文物・制度を取り入れ、近代化をみとめさせねばならないということであった。その中心人物の一人は外務卿（大臣）・井上馨であった。彼はこのような欧化政策の一環として鹿鳴館をつくり（明治16年）、この社交場を中心に風俗、演劇、食事、宗教、美術、文学などを欧米化、近代化したいと考えていた。

維新政府は、条約改正の予備交渉ならびに欧米諸文明の見聞のために、早くから右大臣・岩倉具視を中心とする使節団を欧米に派遣していた（明治4年、1872）。そしてその使節団のなかに、日本にはじめて衛生学なる新しい学問を紹介した長与専斎（1838-1902）がいた。長与はこの視察において、英米では sanitary とか health, ドイツでは Gesundheitspflege という言葉をしばしば耳にした。それはそれまで彼が学んできた医学とは異なり、社会問題、都市問題と深く関わる学問であった。その対象は、伝染病の予防はもち論、貧民の救済、土地の清掃、上下水道の整備から、市街家屋の建築方式まで、きわめて広く、しかもそれだけで一つの行政組織ができるほどであった。彼は、それまでその名称すら知らなかったこの学問に「衛生学」なる名称をあたえ、自分の畢生の仕事にしたいと考えた。

当時コレラをはじめとする伝染病の流行は、都市における上下水道の未整備もあって止まるところを知らず、都市衛生の改善は急務中の急務であった。東京（旧江戸）について云えば、もともとこの都市は戦国時代の攻防に備えた城下町であり、維新以降の急速な近代化に対応できるような状態にはなかった。街区は狭く道路は曲がりくねり、車や馬の運搬の便は悪く、また運河には廃棄物が沈殿して船の往來をさまたげ、商業、防火、衛生などすべての障害になっていた。住民の生活環境に目を向ければ、劣悪、非衛生的な貧民街（スラム）に住む人々が多く、これら住民の衛生環境をどう改善するか、ということはきわめて重要な課題であった。このような劣悪な状況にある東京を改善し、近代化するためには衛生学はまさに不可欠の処方箋であった（近代都市にあっては、衛生学は人間の生活環境を如何に整備するかという意味で、都市計画全体に関わっていたのである）。

長与専斎は明治8年、内務省が発足すると、ただちにその衛生局長に就任

し、その後16年間その職にあった。彼は「大日本私立衛生会」を設立して(明治16年)、各地の上下水道の整備や学校、公園の計画等の調査を行うとともに、会員による講演会を開催して、現在でいう学会活動をも行った。会の目的は「国民の健康を保持促進する方法を討議講明し、一には衛生上の知識を普及し、一には衛生上の施政を翼賛する」ということであった。同会の機関誌「大日本私立衛生会雑誌」は、講演記録や寄稿を編集刊行して啓蒙活動を行った(この雑誌は大正13年から「公衆衛生」に改められた)。本小論の高木兼寛の東京都市計画に関する論文も、(高木自身幹事をつとめる)この会での講演を記録したものであった。

東京の都市計画が本格的に始まったのは、明治17年、東京府知事・芳川顕正が内務卿(大臣)・山県有朋に「市区改正意見書」なる答申をしてからであった。中世都市・江戸から近代都市・東京に脱皮するための「市区改正」(つまり「都市計画」)はこの時に始まるのである。この意見書の中で芳川知事は「道路、河川、港湾、橋梁、鉄道、上下水道、公園、墓地、市場、火葬場などを整備して、東京をして東洋一の一大都市たらしめん」と抱負をのべている。しかし残念ながら、この答申はいろいろな事情のために中々実施するに至らなかった。

その事情の一つは、井上馨外務大臣が、この山県大臣の「市区改正」案に対抗するもう一つの案「日比谷中央官庁集中計画」を提出し(明治19年)、「市区改正」案を棚上げにしようとしたからであった。山県の「市区改正」案が主に道路、区画の整備と路面電車の敷設による便利性に重点をおくのに対して、井上の「官庁集中計画」案は国会議事堂、首相官邸、最高裁判所などの諸官庁を日比谷に集中させて、西洋建築の壮麗な町並みを現出させようとするものであった(鹿鳴館的な発想といわれた)。

然しこの華麗な井上案も、井上自身の失脚によって挫折し(自由民権派による失脚。明治20年9月)、再び山県の「市区改正」案が東京の都市計画の主体を担うことになった。もともとこの山県案というのは(先述したように)、馬車や市電には狭すぎる道路や橋を(とくに軍事的便利性のために)広く造り直すというのが主な目的であり、東京の長期的将来計画像を描くというもので

はなかった。とくに住民の衛生環境を考慮、改善する視点はほとんどなく、住民のための飲料水、爽やかな空気、純良な食物の供給、衣服・住居の乾燥、清潔などといった衛生的な計画はほとんど含まれていなかった。

このような問題に衛生学者として始めて独自の见解を提出したのは海軍軍医・高木兼寛(1849-1920.成医会講習所校長)であった。彼は、明治17年(1884)の11月と翌18年1月の大日本私立衛生会の常会において、それぞれ「裏屋ノ建設ハ衛生上及経済上ニ害アリ」と「東京衛生事務ノ拡張ハ市区ノ改正ヲ要ス」と題する都市計画に関する講演を行っている。彼は明治9年から5年間の英国(ロンドン)留学を終えて、帰国したばかりであった。

かつて英国は、この国で始まった産業革命によって、18世紀後半から19世紀初めにかけて大きな社会変動を生み、農村から多くの労働者をロンドンその他の工業都市に集中させた。労働者は都市の中心部を占め、上下水道もなく、生活の排泄物、塵芥の社会的処理もない状況で、次第にスラム化して悲惨な衛生環境を生みだしていった。

しかし、兼寛が留学するころになると、近代公衆衛生の父と云われたEdwin Chadwick(1800-1890)らの熱心な啓蒙活動(住宅問題、上下水道の普及など)によって、ようやく好ましい方向に向かっていった(公衆衛生法の成立、1848年)。上下水道、交通、道路、住宅の整備がぼつぼつ実行され、スラムにいる住民の生活もかなり改善されていった。岩倉使節団(明治4年、1871)の長与専齋が後に「世界万国衛生法ノ最モ能ク實際ニ行キ届キタルハ英国ヲ以テ第一トナスコト欧米諸国ノ許ス所ナリ。是他ナシ」(明治16年の私立衛生会の発会式での祝辞)と述べたのは、実際にその進みつつある現状をみたからであった。

2. 高木兼寛の東京都市計画面

さっそく兼寛の都市計画に関する二つの講演(論文)を大日本私立衛生会雑誌(1884; 18: 15-19と1885; 20: 4-9)から引用することにする(現代語に改変)。

〈裏屋ノ建設ハ衛生上及經濟上ニ害アリ〉

今日ノ私ノ演説ハ風味ニ乏シモノデアルガ、真味ヲ玩味セラレレバ幸甚デアル。

コノ演題ノ実現ハソレホド容易デナイコトハ十分承知シテイルガ、他日必ズ実行ノ日ガクルト思ワレルノデ敢エテココニ述ベル次第デアル。

マズ裏屋(裏長屋、裏だなともいう一筆者)ノ建築ガ衛生上ニ害ガアル理由ヲココニ述ベル。身体ノ健康ノタメニ、キレイナ水、空氣、純良ナ食物ナドガ必要デアルコト、サラニ衣服、住居ノ乾燥、清潔ナドガ必須デアルコトハ云ウマデモナイ、スベテ今日ノ衛生家ノ眼目トスルトコロデアル。シカルニ裏屋ノ建築(建物のこと一筆者)ハーツモコレヲ十分ニ供給スルコトガナイ。

マズ第1. 衣服ノ乾燥、清潔ヲ得ルコトガデキナイ。家屋ノ外ニ空キ地ガナイタメ、所謂モノ干ヲ屋上ニ設ケテソノ乾燥、清潔ヲ得ヨウトスルガ、コレニモ限度ガアリ、多人数ノ衣服ヲシバシバ洗浄、乾燥スル機会ハ殆ド得ラレナイ。マタ箆筥、長持ナドニシマッテアル衣服ヲ空氣ニ晒シ、乾燥スルコトナドハサラニデキナイ。

2. 住居ノ乾燥、清潔モ得ラレナイ。家屋外ニ余地ガナイタメ、空氣ノ流通ガ悪ク、塵埃ガタマリ、室内ヲ汚シ、ソノ上日光ガ少ナイタメ室内ハイツモ湿氣ヲ帯ビテ、乾燥スルコトガナイ。

3. 従ッテ新鮮ナ空氣モ得ルコトガデキナイ。

4. マタキレイナ水モ得ルコトガデキナイ。諸君了知ノゴトク裏屋周囲ノ下水ハイワユル箱下水デアリ、構造ノ粗末ナタメ破損シ、汚水ガソノ外ニ浸漏シ、飲用水ヲ汚シテイルタメデアル。

5. 食料ノ質ガ優良デアッテモ、汚イ水デ煮炊キシ、サラニ不潔ナ空氣ニ触レルタメ、優良ナ食べ物ニナル筈ガナイ。

6. コノヨウナ住宅狀況ノタメ、自家デ營業ヲスル者ハ精神的ニ落ちツクコトガナイ。仕事ヲ操ル場所ガナイタメ、路傍ニオイテ操作セザルヲ得ズ、マタ路傍ニアッテモ馬車往来ノタメ自身ヲ害セザルヨウ注意セネバナラズ、サラニ往来ノ者ヲモ害シナイヨウニ心掛ケネバナラナイ。

7. 妻子、幼童ハツネニ上ノヨウナ非衛生ナ室内ニ居住シ、マタ小兒ノ如キハ路傍ニオイテ遊戯スルタメ、コレマタ自他ニ大ナル害ヲナスモノデアル。

8. コノヨウナ状況デハ仕事ノナイトキデモ安楽ナ場所ガナク、トクニ夏期ノ納涼ヲ要スル場合ニモ安楽ニコレヲ得ルコトガデキナイ。

以上ノゴトク裏屋ノ建築ハーツモ衛生上益アルコトナク、却ッテ身体ノ健康ヲ大イニ害スルモノデアル。身体ハ漸次衰弱ニ陥リ、マタ成長シツツアル幼児、小兒ハ十分ニ發育スルコトガデキズ、終ニハ疾病ニ陥リ、医薬ヲ要スルニ立チ至ル。軽症ノ場合ニハ日々医師ノモトニ通イ、薬ヲ服シ、若干ノ薬札ヲ払エバ済ムガ、重症ニアツテハ医師ニ往診ヲ願ウタメ、コレニ酬ユル金円モ決シテ僅少デハ済マサレナイ。裏屋ヨリ揚ガル金円デハ、コレヲ償ウコトハ難シク、タトイ償ウコトガデキテモ時間ノ浪費、(疾病ニヨル)休業ノタメノ損失、貴重ナル身体ノ衰弱ト生命ノ短縮ニヨル損害ハ決シテ償ウコトハデキナイ。私ハソレ故、裏屋ノ建築ハ衛生上及ビ經濟上ニ害アリ、ト深く信ジテ疑ワナイ。若シ裏屋ヲ設ケナイトキハ、コレト全く相反スル良結果ヲ招来シ、タトイ裏屋カラ揚ガル金円ガヨリ少ナクナツテモ、家族一統健康活潑デアルトイウ利益ノ方ガハルカニ大キクナルノデアル。

今述ベタコトニツイテ人ハ言ウカモ知レナイ、コノ状態ヲ改良スルノハ言ウベクシテ行ウハ難シト、コノ広イ市街ニハ数十万ノ細民ガスデニ裏屋ニ居住シテイル、如何ニシテコレヲ行ウノカト。私ハコレニ答エタイ。逐ワズシテ自ラ退去スル方法ヲ設ケルノダト。ソノ方法トハ、海外文明国ノ市府デ行ッテイルヨウニ、東京市街内ニ居住スル者ニハソノ外ニ居住スル者ヨリ出費ノ多イ方法ヲ設ケルノデアル。例エバ、府内ニオイテ売買スル物品ニハ幾ラカノ税ヲ課スルヨウニスル。府内ノ住居デハ1カ月5円ヲ要スルノニ、府外ノ住居デハ3-4円デ済ムヨウニスル。コウスルト府内ノ細民ハカナラズ府外ニ住ムコトヲ希望スルヨウニナル。コレガスナワチ逐ワズシテ自ラ去ラシメル方法トイウノデアル。ココデ収納サレタ税金デモツテ府内ノ用水、道路、下水ナドノ費用ニ当テレバ、先般来諸君ガ喋々論ジテキタ清潔法ヲ満足サセル状態ガ間モナクヤツテ来ルコトニナルデアロウ。モチロンコノ改良法ヲ実行スルタメニハ現在ノ市区ヲ改正シ、イワユル東京市街地ヲヨリ限局・縮小シ

ナケレバナラナイコトハ云ウマデモナイ（市区の改正については次の論文を参照一筆者）。

以上ノ結果、家屋ノ後ニ空キ地ガアツテモ、健康活発ナ人タチノ揚ゲル利益ニヨツテココニ土蔵ナドヲ増築シテイクデアロウ。貧民ノ方ハココニ居住スルコトナク次第ニ府外ニ住居ヲ求メルヨウニナルタメ、府内ノ家屋ハスベテ売買場（商業ノ中心地一筆者）トナリ、府外ヨリ馬車ヤ汽車ナドデココニ通ウヨウニナルデアロウ。コノ時ニナツテ始メテワガ東京ハ文明諸国ノ大都府ニモ劣ラヌ富優ノ都府トナルノデアアル。

〈東京衛生事務ノ拡張ハ市区ノ改正ヲ要ス〉

諸君ハサダメシ高木兼寛ハ実行デキナイコトヲアエテ提案シテイルヨウニ思ウカモ知レナイ。シカシコレカラ何か事業ヲ興ソウトスルトキハ、現在ト将来ノ状況ヲ考エ、将来ハタシテソレガ旨ク行クカドウカヲ予見シ、モシ旨ク行クコトガ得知サレレバ、直チニコレヲ唱導、言説シテ世論ヲ喚起スルノハ当然ノコトデアロウ。

マズ私ハ、東京ノ市区ハ少々広過ギル、コレヲ改正、縮小シテモット衛生事務ノ充実ヲハカルベキデアルト考エテイル。

先ズ 1. コノ東京ノ市区ノ改正ガハタシテ可能カドウカデアアルガ、拡大ハサテオキ、縮小ハ可能デアルト信ズル。

即チ 2. 事業ヲ興スニハ資金ヲ要スルガ、市区ヲ縮小スレバ事業ノ区域ハ狭クナリ、事業費ハ少ナクテ済ミ、事業モ成シ易クナルノハ当然デアアル。

マタ 3. 事業ヲ維持、継続スルニハ維持費ガ必要デアアルガ、市区ノ縮小ハコノ維持費モ縮小サセ、事業ノ効率ヲ良クスルハズデアアル。

最後ニ 4. 市区ヲ縮小シテ生マレル結果（経済効果のことか一筆者）ト従来ノママニシテオク結果トガホボ同一ナラバ、ムシロ市区ヲ縮小シタ方ガ勝レテイルニ決マツテイル。

東京ノ人口ハ昔 200 万アツトイワレルガ、現在ハ 80 万ニ減少シテイル。コノ人口ハ英京ロンドンノ人口 350 万ニ較ベテソノ 4 分ノ 1 ニモ充タナイ。シカモ東京ノ面積ハ欧米首府ノ中デモ広ク、ロンドンノソレヨリサラニ広い

ノdeal。ロンドンノ4分ノ1ノ人口デロンドンヨリ広イトコロニ住ンデイルワケdeal。ツマリロンドンデ4人デスム仕事ヲ東京デハ1人デセネバナライノdeal。東京ノ総資産ニツイテモ、ソレハロンドンノ数分ノ1ニ過ギナイトイワレル。衛生事務、ソノ他百般ヲロンドント同ジヨウニデキナイノハ至極当然deal。衛生事務ノ改良ハ市区ノ縮小ヲ要ス、トハコノコトdeal。

モトモト東京ノ土地ハ余地ガ多スギル、ドノ区ヲミテモ平屋ガ多イ、シカモ庭ナドヲモツタメ一戸アタリノ土地ガ大キスギルノdeal。イマ東京ノ全区ヲ縮小シテ現在ノ3分ノ1ニスレバ、衛生事務ノ区域モホボ3分ノ1ニ縮小サレルハズdeal。今マデ1人デ負担シテイタ費用ハ以後3人デ分担スレバヨイコトナリ、衛生ノ事業ハヨリ容易ニ進ムコトニナルデアロウ。市区ヲ縮小スルニハ、従来ノ平屋建テノママデハ難シク、少ナクトモ京橋、日本橋、神田等ノ主ナ市区デハ平屋ノ建築ヲ禁ジ、2階、3階、ナイシ4階建ニスベキデアロウ。コウスレバ従来ヨリズット多クノ人ヲ小サイ面積ノ中ニ入レルコトガデキル。市内ノ住居ニ堪エラレナイ下等細民ハ皆去ッテ田舎ニ赴クベキデアロウ。田舎ハ人口少ナク土地広大dealカラ衛生事務ノ必要度モ少ナク、出スベキ公共費モ少ナクテ済ムカラdeal。一方、市区ヲ縮小シテ人口ガ集中スル市街地デハ、地価モ騰貴シ、公共費モ多ク集マルカラ、衛生事業ハ一層容易ニ進行スルデアロウ。

衛生事務ヲ云々スルニハマズソノ経済効率ヲ考エネバナライ、スナワチ衛生ハ経済ト両立セネバナライ。イマ東京ノ市街ヲ眺メルニ、ソノ区域ガアマリニモ広イタメ無用ノ時間ト費用ヲ使ウ結果ニナル。東京ノ端カラ端マデヲ徒歩デ往復シヨウトスレバ丸一日ハ掛カルデアロウ（丸ノ内ノ如キハ数十町ノ間ヲタダ官庁ガアルダケdealカラ、ソノ間ニ通ズル道路、下水ナドハ官庁ノタメニ役立ツノミデ実ニ不経済deal）。使イヲ出スニモ数人ヲ要シ、時ニハ車ニモ乗セネバナラズ実ニ不便deal。全区ヲ縮小スレバ時間ト費用ヲ節約デキ、コノ余ツタ時間、費用ハスベテ有効ナ資本トシテ利用デキル。ツマリ衛生上一大利益ヲ受ケルノミナラズ、マタ無用ノ衛生費ヲ節約デキル一挙兩得ノ策トイウベキdeal。例エテイエバ、市区ヲ縮小スレバ自然

ニ人力車ノ客モ減リ、車夫ハ転業シテ他ノ労働ニツク、ソウスレバソノ分国ノ生産力モマタ増加スルデアロウ。コノ増加シタ富ノ幾分カハマタ衛生ノタメニ使ワレ、ワガ東京ノ公衆衛生ノ目的モ更ニ達成サレルダロウトイウワケデアル。市街ヲ清潔ニシ、下水ヲ疎通スルナド百般ノコトガ容易ニ進行スルコトニナルノデアル。衛生事務ノ拡張ハ市区ノ改正ヲ要ストハコノコトライウノデアル。

3. 高木兼寛案の意図するところ

まずはじめの論文で兼寛は、裏屋の生活が如何に非衛生的であるかを強調している。当時の裏屋というのは(裏長屋、裏だなどいわれ)、その構造は大体、間口9尺、奥行2間の一戸が5戸ないし10戸連なって一棟となり、その棟が狭い間隔で数棟並んでいるというのが普通の形であった。住人は貧民のことが多く(当時は左官、鳶職など)、平常あまり家を修理しないため萱葺き(またはコケラ葺き)の屋根は雨漏りし、ために壁は落ち骨があらわれ、下に敷いた筵(むしろ)はいつも湿気ているといった状態であった。井戸と便所は普通7-8戸ないし15-16戸の一つあるのみであった。これら貧民は、社会体制あるいは天災地変などで生まれることもあったが、怠惰のために自ら招く場合も少なくなかった。

このような裏屋での生活は、兼寛が強調するように、衛生上良いことは一つもなかった。彼によるとまず、きれいな水、空気、食物を受けることができない、また衣服、住居の乾燥、清潔なども期待することができない。(裏屋の)構造上日光があたらない、風が通らない、ためにいつも湿気が多く、空気が汚れている。下水道がなく(箱下水であり)、飲料水は井戸水であるため、飲み水はいつも下水で汚れている(ために伝染病が絶えない)。空気が淀み水が汚いために、つくった食物も腐敗しやすい。空き地がないため、あるじが仕事をするにも、妻子・幼児が生活するにも、身体的、精神的に障害がおりやすい。総じて、裏屋での生活は、健康上利益があることは一つもなく、病気に加かることばかりである、というのである。

兼寛は、英国セント・トーマス病院医学校（ロンドン）に留学していたころ、同校の公衆衛生学者・John Simon に大きい影響をうけた。Simon は上記 Chadwick と協力して「公衆衛生法」を成立させた人物であり、またロンドン市当局に河川の汚染と下水道の不足をたえず訴えつづけた現実的疫学者でもあった。また当時の英国医学は、一般に疫学的色彩が強く、兼寛はその他にも John Snow や James Lind から影響を受けたと思われる。Snow は上水（給水法）の改良によってコレラの予防に成功した人であり、Lind は食物の改善によって壊血病を予防した軍医である。兼寛の留学時には、これらの業績はすでに市民のものになっており、彼が帰国そうそう裏屋の非衛生を繰り返して指摘したのも、このような現実を目の当たりにしていたからであろう。

文明開化が叫ばれながら、兼寛が帰国した当時の東京はなお近代化から大きく取り残されていた。帰国したばかりの兼寛は、その東京を近代日本の首都にふさわしくするための仕事に是非とも（衛生学を通して）参加したいと考えたのであろう。そして東京を近代化するにはまず市区を改正する必要があると結論したのである（二番目の論文）。つまり市区全体をもっと縮小する必要があるというのである。東京は人口がロンドンの四分の一しかないのに、ロンドンより広いところに住んでいる。ロンドンで4人でする仕事を東京では1人でやらねばならない。この関係を改善して近代都市にするには、まず東京の市区を縮小して現在の三分の一ぐらいにすべきであるというのである。さしあたって京橋、日本橋、神田などの市街地となるところは平屋の建物を禁じ、二階建て以上にすべきであろう。そしてここに人が集まれば、公共費も多く集まるから、上下水道をはじめとする近代的都市衛生も十分に整備できるはずである、というのである。つまり兼寛は、日本の経済的实力からみて東京全体の近代化はまず無理であるから、当座はまず東京をある市街区に限り、その縮小した市街区に限って近代化をすすめたらどうだろうというのである。

ここで問題になるのは、先程の貧民、すなわちこの限られた市街地にすでに住んでいる貧民をどうするか、ということである。兼寛の答えは、さしあ

たつては近代化を急ぐことが重要であるから、貧民は一先ずここから市外地(郊外)に立ち去ってもらおうというのである(つまり生物学でいう一種の「棲み分け」であろうか)。この貧民を郊外に立ち去らせるという発言が、非人間的でしからんというので森鷗外(林太郎)たちの反発、非難が始まるのであるが、そのことは後述するとして、その前にいったい当時の郊外とはどの当たりのことをいうのか、その地域について考察しておきたい。

まず当時の東京の郊外という概念は、現在のそれとはかなり違うようである。当時の地図によると、東京は15区6郡に分かれているが、その区部は現在のJR山手線のずっと内側と隅田川の両岸に限られている。そして江戸と同じ大きさであった東京が、旗本や御家人の屋敷であった山の手を越えて田園地帯へと拡大していくのは、ずっと後(日露戦争後)の都市計画が本格化してからのことであった。たとえば、当時のお茶の水はまだ、本郷や神保町あたりのこれから学校が建ち始める地帯と田園地帯の接点に位置する郊外の一地区に過ぎなかったのである。そういえば夏目漱石の小説にてでくる千駄木、西片、小石川、早稲田などはすべて郊外ということである。慈恵医大があった増上寺界隈も純然たる郊外と考えてよいであろう。

同じ郊外といっても、現在の都三県にまたがる大東京の郊外とは、その地域もスケールもかなり違うのである。つまり兼寛が貧民のために提案した郊外なるものは、彼が市街部の中心に据えた神田、日本橋、京橋からそれほど遠くない地域と考えてよいのである。これはあとで森鷗外の批判を考察する場合にも参考になる事項であろう。

貧民が郊外に立ち去った後の市街地と郊外の変化については、兼寛はこう述べている。「府内(市街地)の家屋はすべて売買場(商業の中心地)となり、府外(郊外)より馬車や汽車などでここに通うようになるであろう。この時になって始めてわが東京は文明諸国の大都府にも劣らない富優の都府となるのである」(初めの論文)と。つまり市街地(神田、日本橋、京橋を中心とする都心)には西歐的な立派な建物が並び商業区として繁盛するであろう、そしてみんな郊外から馬車や汽車でそこに通うようになるであろう、というのである。

このような予想図のオリジナルは、おそらく彼が留学していた頃のロンド

ンであったと思われる。当時のロンドンでは地下鉄の発達によって住宅が都心から郊外に移り、職と住の分離が庶民の間にまで広がり始めていた頃である。19世紀半ば、地方からロンドンに乗り入れる鉄道は、いずれも郊外のターミナルで終わっており、これらターミナルの間を行き来するには馬車しかなく、混雑をきわめた。また元来ロndonは、いくつかの都心(政治の中心街(ウェストミンスター)や商業の中心街(シティー)など)から成る都市であるが、これら都心とターミナルを往来するにも馬車しかなく、とにかく混雑をきわめた。これを一挙に解決したのは地下鉄であった。各都心、各ターミナルの間を地下道でつなぎ、そこに鉄道を走らせたのである(土地所有者との話し合いを必要としない長所があった。最初の地下鉄は1863年である)。初期の地下鉄は蒸気機関で走る汽車であったため、トンネルの上に通風孔はあったものの、煙の充満がひどくて乗客の健康によくなかった。そこで1890年からは電気で走る(電車)地下鉄が登場した。兼寛がロンドンで生活したのは1875年(明治8年)から80年までであったから(残念ながらまだ電気地下鉄はなく)、彼は煙で息苦しい汽車の地下鉄を利用していた筈である。

兼寛が論文の中で、東京の郊外から馬車や汽車で都心の職場に通う人々を描写したのは、彼がロンドンで目の当たりにした郊外から馬車や汽車地下鉄で都心に向かう庶民の姿を思い浮かべたからであろう。

さて話は前後するが、都心部にすでに住んでいる貧民を如何にして郊外に移住させるかという問題である。兼寛は、この論文で「逐(お)はずして自ら退去する方法」を提案したわけであるが、それは(先進諸国でも実施されていた方法らしいが)都心部に住む者には郊外に住む者よりいくらか税金を高くしたらどうかというものであった。たとえば都心部では生活するのに月5円かかるところを、郊外では月3-4円ですむようにする、そうすると貧民は必ず郊外に移ることを希望するようになる、というのであった。

しかし、この「逐はずして自ら退去…」という言葉が、いかにも非人間的であるというので、森鷗外をはじめその後多くの批判者から反発、反論されることになるのである。

4. 森鷗外（林太郎）の高木兼寛案批判

高木兼寛と森鷗外

高木兼寛の強力な批判者でありライバルであった森鷗外（林太郎、1862-1922）は、兼寛がこの論文を発表した頃、ドイツに留学していた。ドイツ留学は学生時代からの念願であり、彼が陸軍に入ったのもそのためであったという。明治17年から4年間、PettenkoferやKochについて衛生学を学ぶにつれ、彼は衛生学こそ日本の近代化にとって軍事や産業振興以上に重要であると確信するに至った。そして自分こそその権威者になるべき人間であるという自負に変わっていった。彼がドイツに出発した明治17年は、ちょうど内務卿・山県有朋の下で「東京市区改正意見書」が出された年でもあった。

鷗外は留学中、実家から衛生学雑誌「大日本私立衛生会雑誌」を送らせていたから、その中に頻繁に掲載される高木兼寛の論文はいつも注目していたであろう。4年間に衛生学に関する論文が12編も出されていた（「食物精粗ニ関スル利害ノ証例」「脚気病予防説」「海軍兵食改良結果」「囚人脚気病予防ノ景況」「海外衛生上景況ノ報道」「汚水ハ必疎通ス可キノ説」「浴法」「日本風ニ着座スルハ身体發育ニ害アルノ説」「日本風ノ草履、下駄ト靴ノ利害便否」「体育ヲ盛ンニ精神ノ発達ヲ進ムルノ説」「裏屋ノ建設ハ衛生上及經濟上ニ害アリ」「東京衛生事務ノ拡張ハ市区ノ改正ヲ要ス」などである）。

兼寛はこれらの論文のなかで、西洋文明のすぐれた点を指摘し、日本の近代化のためには是非ともこれを見習うべきであると主張していた。食事にしても日本食（白米食）は蛋白質が少なく洋食に劣り、脚気の原因になると力説した（脚気の栄養説）。衣服は和服より洋服の方がすぐれ、作業しやすく身体にもよいと云い、また住の問題にしても椅子、ベッドの生活の方が身体、健康にはるかに優れていると主張した。とにかく日本人の生活全体を洋風化（近代化）することが合理的、健康的であるばかりでなく、そのことはまた鹿鳴館を中心に文明開化・近代化政策を推進している伊藤博文や井上馨らの路線

にも合致することであると強調した。

仮装舞踏会 仮装舞踏会といえば鹿鳴館時代の一つの象徴であるが、明治20年4月の伊藤博文首相官邸（永田町）で行われたものももっとも有名であった。条約改正を促進するために欧化政策をとった伊藤、井上ラインが西洋のファンシーボールを真似たものであった。仮装参加者（3-400名）には、大物だけでも伊藤博文（総理大臣）、同夫人、同令嬢、井上馨（外務大臣）、山田顕義（司法大臣）、山県有朋（内務大臣）、大山巖（陸軍大臣）、同夫人、榎本武揚（逓信大臣）、有栖川宮熾仁親王、同威仁親王、渋沢栄一（実業家）、同令嬢、大倉喜八郎（実業家）、高山五六（東京府知事）、三島通庸（警視總監）、同令嬢、渡辺洪基（東大総長）、高木兼寛（軍医総監）らがいた。

一番乗りの仮装者は、日本武尊に扮した長崎省吾（後の慈恵会理事）であった。夜が更けるころになると夜会はますます佳境に入り、そこに現れたのは高木兼寛軍医総監であった。その仮装というのは僧正遍照の姿であった。十一枚の法衣を重ね、一曲終わるごとに一枚ずつ脱ぎ、赤から紫へ、紫から黄へと変わっていくと、その度に女性陣からキャーキャーという黄色い声援が上がり、兼寛も大得意であったといわれる。

伊藤、井上らの鹿鳴館を中心とするこのような催しには、もちろん鷗外は参加しなかった。そしてこのラインに近い兼寛の行動に対しては、「軍服を着た者までが、このような場に出入りする」といって暗に兼寛をなじった。

本格的衛生学者を自認する鷗外にとっては、上に並記した兼寛の論文は可なり気になる代物であり、強いライバル意識と軽蔑の感情をもちながら読み続けたと思われる。これら論文に対する批判は、在独中に「日本兵食論」と「日本家屋論」と題してドイツ語で発表された。両論文とも西欧学者の文献を多数引用しながら書かれたもので、「日本兵食論」の中では、兼寛の白米食を脚気の原因とする説に強く反発し、日本古来の白米食に病気をおこす欠陥はなく、あくまでもこれは守るべきであると主張する（しかしこの主張は周知

のように、兼寛の兵食改善つまり麦飯食による脚気撲滅という現実的証明によって完全に敗北した)。「日本家屋論」の方は、帰国後みずからこれを和訳し、「日本家屋論自抄」として出版した(読売新聞、明治21年12月5日)。その中で、裏屋の存在に対しては賛成ではないにしろ、西欧のスラムよりはまだまだましであるとして、(兼寛とは反対に)むしろ肯定的であった。

また留学後期に読んだ論文「裏屋ノ建設ハ衛生上及經濟上ニ害アリ」と「東京衛生事務ノ拡張ハ市区ノ改正ヲ要ス」に対しては、帰国後新進の衛生学者として論文「市区改正ハ果シテ衛生上ノ問題ニ非サルカ」を発表し、これを激しく批判した(明治22年(1889))。こうして兼寛に対する批判は、個々の日本家屋の衛生的アプローチ「日本家屋論」から都市全体の問題としての「市区改正ハ果シテ衛生上ノ問題ニ非サルカ」にまで拡大していった。

森鷗外の論文「市区改正ハ果シテ衛生上ノ問題ニ非サルカ」

鷗外はこの論文のなかで、兼寛の提案は単なる思いつきにすぎず、正式の都市計画というものではない、都市計画のごとき多岐にわたる問題は、まず前業(Vorarbeiten)という準備段階から始めるべきであると主張する。「市区改正(都市計画)ノ図案(Plan)ハ市区改正ノ前業成ツテ而シテ後ニ作ルベキモノナリ、改正ノ前業未ダ其効ヲ終エズシテ作りタル図案ハゴウモ価値ナキモノナリ」というのである。都市計画にはまず採光、換気、上水下水などの前業*が必要であり、その前業たるやそう簡単に一朝一夕にできるものではない。ベルリン市の下水工事の前業には7年の歳月を要し、ミュンヘンのそれには5年の歳月を要した。東京の都市計画ならその数倍はかかるであろう。兼寛のように思いつきで計画案など出されては迷惑であるというのである。

そしてさらに詳しく前業の三つの段階—預図(Programm)、真の前業(wirkliche Vorarbeiten)、図案(Plan)について説明し、西欧各都市の実例について多くの文献を引用しながら解説している(原稿用紙30枚ばかりの論文

* 上水の前業(預図)を例にすれば、1. 水量 (イ) 1年平均量 (ロ) 1日最多量 (ハ) 1時最多量 (ニ) 真需要量。2. 圧高 (イ) 高市と低市の別 (ロ) 圧線。3. 水樹(ホッホ、レゼルボア)。4. 取水および澄水法

になんと 50 人以上の学者の氏名がでてくる。文献をいっさい引用したことの無い兼寛の論文とはきわめてよい対照である)。

しかし筆者のみるかぎり、鷗外はたしかに西欧諸都市の前業については詳しく説明しているが、最も肝心な東京はこうなって欲しい、東京の前業はこうあるべしという提案がまったく出されないのである(このことは、兼寛との間に展開された脚気論争のときにもそうであった。兼寛の栄養説に対して、自分は脚気の原因をこう考えるという主張はまったくなく、ただ多くの学者の学説を紹介して、日本食に欠陥はないと繰り返すだけであった)。鷗外自身もこのことに気がついたらしく、この論文の終りの方で「改正ノ前業ノ説明ヨリ覚エズ号ヲ積ミ今ニ至ル。顧ミテ順序ナク綱目ナキ冗長文字ヲ印刷セシノミ。速ヤカニ上水ノ前業ヲ述べ本編ノ局ヲ結バン」としている。しかしこの上水の具体的前業をのべる段になるとまたまた Koch はこういつている、Pettenkofer はこういつているのと多くの学者の文献を引用して理屈をこねるのみで一向に現実性がないのである(皮肉なことに、東京ではすでにこの 4 年前(明治 18 年)から長与専齋らの発案で上水的设计, 着工がもう進んでいたのである。東京に前後して横浜, 箱根, 長崎, 大阪, 神戸, 広島などでも上水の工事が進められていた)。

しかし鷗外がこの論文「市区改正ハ果シテ……」で、もっとも強調したかったのは、むしろ兼寛が先に述べた「逐はずして自ら退去する方法」に対する反論, 反駁であったように思われる。貧人に対して「去レヨ」と命ずるのは許されない、高木の都市計画とは、要するに富人を利して貧人に損をさせることか、公衆衛生とは富人のためのものか、富人といえども公衆の一部にすぎないではないか、残りの人々(貧人)に不利益になってもよいのか、と語気強く論駁するのである。貧人を都心から追い出し町をきれいにしようとするのは、あたかも塵を窓から放り出して解決しようとするようなもので、問題を拡散させるだけである。貧人を追い出すような都市計画には反対である。日本の労働者は幸い静穏順良であるが、都市計画の如何によっては恨みを買ひ、社会を瓦解させること(暴動?) だってあるのだ、というのである。もし貧人に退去を求めるのなら、まず代替地を設けるべきで、いやしくも真に公

衆の衛生を計らんと欲せば、よろしく貧人を先にし、富人を後にすべし、と結論する。

鷗外同調者による批判 兼寛の、貧人を「逐はずして自ら退去…」という言葉には多くの人が引っ掛かるとみえて、その後も最近まで鷗外の心酔者、同調者からの批判、論駁が後を絶たない。

小堀桂一郎もその一人で、彼はその著「若き日の森鷗外」(1969)の中でこう述べている。「これは(高木兼寛案のこと)、乱暴なというより、粗雑な、というべき議論であるが、これが日本で最初の医学博士をうけた五人のうちの一人の学者の思考構造であった。……高木という衛生学者の都市近代化構想がおおよそ学問的考慮とは無縁な、外見の整備のみを事とした、例えて云ってみれば鹿鳴館的発想にすぎないことは露骨にあらわれている」と(筆者評—この批判者の視点は一体に情緒的で、兼寛の論文のどこがおかしいのかを、もっと具体的、科学的に論ずべきではないか)。

その後、伊達一男もその著「医師としての森鷗外」(1981)の中で「これは(高木兼寛案のこと)、要するに東京市内から貧乏人、労働者を放逐して、金持、資本家だけの都会とし、高層建築を建設し、道路、港湾、上下水道等を完備しようとする暴論であり、おおよそ衛生学を学んだ人間の発想することではない」と断じている(筆者評—この著者はあまりに鷗外に心酔し過ぎるため、ある理念が固まってしまっ、兼寛が云っていない言葉にまで拡大し、論法が独断的である。兼寛は税金に少し差をつければ貧人(労働者とは云っていない)は次第に去っていくだろうと云ったのであって、「放逐」などという過激な言葉も使っていない、もとの住所に残りたければ残れるのである)。

最近では、東秀紀がその著「二つの東京物語」(1994)の中でこう述べている。「高木は鹿鳴館に出入りする欧化主義者で、井上派として知られていた……。後に高木と鷗外は脚気の原因をめぐって激しく論争し、その結果は軍隊における洋食採用を主張した高木が正しかったことが証明された。しかし、二人の西洋化への姿勢の違いが、都市計画に関しては高木を貧民の軽視へと進ませていったことは、公平を期するために述べておく必要がある」と云っている(筆者評—この著者は公平を期するために、今度は脚気論争に負けた鷗外

に味方したいという意向らしいが、脚気論争に兼寛が勝ったのは、何も彼の西洋化への姿勢にあったのではなく、彼が脚気病の本質（栄養学的本質）をつかんでいたからである。そのことは彼が改善食を洋食からより有効な麦飯食（和食）に代えていったことから明らかである）。

しかしとにかく、兼寛の論文の中に鷗外のいう「去れよ」とか、伊達一男の「放逐する」といった言葉がなかったにしろ、兼寛のなかに貧人を富人より軽くみる思想があったことは確かであろう。

高木兼寛案の弁護

たとえ軽いものであったにしろ、兼寛の口から「逐はずして自ら退去……」といった言葉がどうして出たのか、筆者なりに考えてみたい。

まず明治初期、日本の近代化を指導したエリートたちは、兼寛を含めてもとは武士であり、士族に属する人たちであったことを忘れてはなるまい。封建思想からの脱皮に限界があったことは容易に想像できるのである。兼寛の場合も下級武士とはいえ、古くからの武士として戊辰戦争にも参加している（彼はまた自分が名門・藤原氏の出であることもかなり意識していたようである）。

当時、大日本私立衛生会では都市計画に関する討論がしばしば行われており、そこでは「ある限定された市街部を西欧なみの街並みにするにしろ、そこに現に存在する裏屋部落をどうするのか、そこに住む貧人をどうするのか」についてもずいぶん激しく議論されていた。兼寛の親友・松山棟庵などもその問題についてこのように述べている。「東京一般ノ公衆衛生ニ関スル事業ハ一トシテ完全セルモノナク……最モ厭ウベキハ裏屋ヲ造ル風習ニアリ……一歩ヲ裏屋ニ入ルル時ハソノ不潔タル犬ノ糞ヨリモマタ尚甚ダシキモノアリ……サレド裏屋社会ノ人物（貧人）ガソノ歩ヲ進メテ士君子ノ地位ニ上ルヲ待ツハナオ手ヲ空シウシテ食物ノ至ルヲ待ツガ如クソノ未ダ食物ヲ得ザルノ前ニ餓死スルト一般貧者ノ富ヲ致スノ前ニ富者ハ必ず貧者ト共ニ病魔ノ侵ス所トナリソノ命ヲ落トスヤ必セリ」と。怠情な貧人がよく働いて、富を得る

日まで待つことなどとても出来るものではない、そんなことをしたら彼らと一緒にこっちまで病気になって死んでしまうだけだというのである。とにかく近代化を急がねばならない。

兼寛としては、この松山をはじめ私立衛生会のメンバーの意見を参考にしながら、何とか貧民を都心から立ち退かせる良い方法はないものかと熟考したに違いない。そしてその熟考の結果、税金に差をつけたらどうか……という先程の名案(?)が浮かんできたというのであろう。当時としてはむしろ穏健な意見だったのではないだろうか。

私立衛生会の士君子からみれば、まだ封建時代をやっと過ぎたばかりの頃であり、ある程度の差別意識をもって貧人をみたとしても止むを得なかったのではないだろうか。あの啓蒙思想家・福沢諭吉ですら、紋付き袴を着するときは、小声で「大小(二刀)を差してみたいな」と呟いたというではないか。

“貧人は郊外に退去”という、いかにもどこか遠い所に立ち去らせるような感じになるが、先述のように当時の郊外と現在の一都三県にまたがる大東京の郊外とでは大分意味が違うのである。神田、日本橋、京橋あたりを市街地(都心)とすると、北はお茶の水、本郷、小石川、南は芝増上寺、三田、麻布あたりはもう郊外であり、都心からそれほど離れていないのである。事実、鷗外は郊外の本郷に住居を構えており、兼寛の方ははじめ都心の京橋に住み、後に郊外の麻布に引っ越している。

兼寛は、東京にもロンドンのような商業中心街、政治中心街など(複数の都心)が形成され、庶民は郊外からそこに馬車や汽車で通うようになることを想像していたようであるから、彼の頭のなかでは、批判者が云々するほど富人、貧人を差別していたようには思えないのである。

人間の思想といったものは、もっと長い期間の事績をみてみないと、そう簡単に結論できないのではないか。鷗外は兼寛を非人間的と評したかったのであろうが、兼寛の事績を実際にながめてみると到底そのようには思えないのである。兼寛が、貧しい病者のために施療病院をつくり、長年その運営に苦しみ続けたことはよく知られた事実であるし、また多くの海軍兵士が脚気

病に苦しむのを見て、これを研究し、苦勞のすえ遂にこれの撲滅に成功し、日清、日露の両戦争を勝利に導いたこともよく知られている。むしろ兼寛の脚氣の研究に終始反対し続け、日清・日露両戦争では陸軍から多くの脚氣患者、死亡者をだし、しかもそれにたいして何の責任もとろうとしなかった陸軍軍医部長・森鷗外こそその人間性が問われるべきではないのだろうか。

そうであるなら、兼寛に対する先程のあの激しい非難の言葉は一体何だったのであろうか。最近、東秀紀はそれについて、それは鷗外のドイツ時代の恋人・エリスにたいする感傷だったのではないかと述べている。たしかに鷗外はベルリンで、裏屋に住む貧しい女性・エリスを愛し、そして帰国後彼女が鷗外を追って日本にくと（自分の立身のために）これに背き、思い惑いながらも再びドイツに帰している（鷗外の処女作「舞姫」はこのことをあつかったものである）。東によると「鷗外は庶民のための都市計画という思想を貫くことによって、別れたエリスに心の中で報い、二人の愛を永遠のものにしたかったのではないか」というのである（筆者にはこれ以上この問題に立ち入る力はない）。

この小論では、兼寛と鷗外の都市計画を比較し、その是非優劣を論ずるつもりはなかった。そして比較したところで意味のないことであろう。ただこの論争後の現在までの東京の発展過程を眺めると、都心と郊外の分離とか、都心における高層建築化とか、あるいは交通網の発達による日常的な人の流れとか、大枠においては兼寛の予想した通りに展開していったようには思われるのである。

5. 近代化と伝統

兼寛がロンドンに留学したのは明治8年(1875)から同13年までの5年間であった。この時期、英国国民は産業革命による経済繁栄に沸き返っていた。鉄道は網目のように敷設され、通信網もほぼ完成の域に達し、大型汽船は定期的に就航し、あらゆる生産品を世界に輸出し、その見返りに世界中から原料、食料、贅沢品を輸入していた。兼寛が留学を終え、帰国したとき、英国

を做って政府の欧化政策、近代化政策に協力し、伊藤・井上ラインの鹿鳴館運動に奮って参加したのも当然であった。

しかし、30年後の1906年(つまり日露戦争勝利の翌年)に、兼寛は再びロンドンを訪ねることになるが、この時にはかつての欧化主義的傾向はすっかり影をひそめ、むしろ伝統主義者として帰国するのである。戦勝に自信をつけた日本とは反対に、彼はロンドンのなかに近代文明の凋落の兆を見たのではなかろうか。汚くなった街並をみて大きなショックをうけたはずである。帰国後の彼は、こんどは日本古来の大和魂、武士道精神を涵養し、晩年は青少年の体力、精神力の減退を嘆き、その阻止のために狂気のように全国を講演行脚する。そして兼寛自身は、古事記の研究に熱中し、また神道禊の行に全身を投じていくのである(最晩年は彼独自のある宗教的境地に達していたといわれる)。

兼寛がロンドンで見たものは、同じ頃(1900-3)ロンドンに留学していた夏目漱石(1867-1916)が見たものと同じであったと思われる。それは経済的繁栄の裏側に出現した救いようのない環境汚染であった。工場から吐き出される煙は霧の粒子となって太陽をさえぎり、街を汚し、市民はこの煤煙と塵埃を吸収して、彼らの肺臓をタール化しつつあった(ロンドン名物の霧であった)。経済繁栄するロンドンが、一方では市民の生存さえ危うくするほど環境を汚染していることを知って漱石は愕然としたのである。

一方、鷗外がドイツに留学したのは、漱石の留学の少し前、もう19世紀も終わりに近い明治17年(1884)からの4年間であった。この時期ドイツでは医学がまさに最盛期に入るところで、彼が研究室でうけた印象もさぞ強烈だったと思われる。脚気の治療を念頭におきながら留学した兼寛とは違って、鷗外はもっと大きな野心—日本の近代化のパイオニアたらんとする野心を抱いてヨーロッパに赴いた。日本の近代化は自然科学のみならず文学の領域でも起こっており、彼は医学、衛生学のみならず西洋文学にたいしても強い関心をもっていた。

そんな時(ミュンヘン滞在中、1886年)、彼の生涯に長く影響するある論争「ナウマン論争」に巻き込まれるのである。ナウマン論争というのは、日本に長

く滞在したことのあるドイツ人地質学者 Edmund Naumann (1854-1927) が発表した「日本論」に対して、鷗外がばけしく反駁した論争のことである。Naumann が書いたのは「日本の伝統的文化は高度に発達、洗練されたものである。しかるに、いまの日本人はそれをすっかり改めて西洋化(近代化)しようとしている。その西洋化たるや、ほんとうの西洋を知らず、まことに浅薄な模倣である。あれだけ高い文化を自ら放棄して、西洋文化の浅薄な模倣をするということはまことに残念である」というものであった。つまり Naumann は、日本の近代化と伝統について深く、しかも重要な問題を提起したのである。西洋に近づけば近づくほど良いことだと考えていた鷗外には大きなショックであった。

鷗外は、この痛いところを衝いた Naumann に対して、早速ドイツ語で反論を書いた。しかし彼が Naumann からうけた影響はきわめて大きかったといわれる。最近、加藤周一はこのことについてこのように述べている。「この時の鷗外の痛いところを衝かれたという意識は長く彼のなかに残り、その後の日本での医学活動、文筆活動に大きく影響した」と。日本の伝統文化を簡単に捨てて西洋をモデルにして近代化を進めても、問題はそう簡単に解決できないことを知った鷗外は、自らを「洋行帰りの保守主義者」と称して、近代化にも伝統にも与することをしなくなったのではないかというのである(その辺り、兼寛が英国流の See and do, don't think too much を地で行ったとすれば、鷗外の方は Think too much になってしまったのかも知れない)。

早年、晩年にそれぞれ近代化と伝統主義に全身を置き、「君子豹変す」とまでいわれた兼寛とはことなり、鷗外の場合は、知性派らしくそのどちらにも身を置くことをせず、どちらも展望できるある視座に身を置き、その場に応じて論評し、行動したというべきではないだろうか。脚気論争においても、また都市計画論争においても、彼の論旨をみると、どうもそのように感じられるのである。

兼寛、鷗外の晩年と死 兼寛の晩年は波乱に満ち、しかも悲劇的であった。娘、息子三人を次々と失い、悲しみのあまり鬱病状態と

なり、回復しないままこの世を去るのである（大正9年4月）。

これとは対照的に、鷗外の晩年は静かであった。萎縮腎という慢性病が少しずつ悪化し、仕事を続けながら、静かに死をむかえた（大正11年7月）。そして死の三日前、彼は親友に遺言を口述した。「余は石見人（いわみのひと）森林太郎として死せんと欲す。宮内省陸軍皆縁故あれども生死の別る瞬間あらゆる外形的取り扱いを辞す。森林太郎として死せんとす。墓は森林太郎の外一字もほる可らず」と。静かな死のわりには、遺言は意外に激越なものであった。一説には、叙爵の沙汰のないのにこだわったのだ、ともいわれている。このあたり、二人の生き方そのものをみる思いがする。

兼寛と鷗外を悩ましたこの近代化と伝統の問題は、100年後の今日でもいまだに未解決の問題として存在し続けている。むしろ問題ははるかに深刻なかたちで巨大化しつつある。（濃縮した表現をすれば）近代化が進むほど、文明は爛熟し、人心は荒廃し、拝金主義が蔓延し、環境は破壊され続ける。そして伝統的な宗教も、倫理思想も形骸化するばかりで、この近代化の弊害を修正する力を失っている。精神的貧困という文明病はますますはびこるばかりである。

最近、大江健三郎もこの問題について「日本の近代化はひたすら西欧にならうという方向づけのものでした。しかし日本人は伝統的な文化を確呼として守り続けようともしました。このあいまいな進み行きはアジアにおける侵略者の役割にかれ自身を追い込みもしました。…開国以来百二十年の現代の日本はこのあいまいさの二極に引き裂かれていると私は観察しています（ノーベル賞受賞講演）」と述べている。

それにしても兼寛と鷗外がこのような伝統と近代化の問題に（原始的な形にしる）すでに明治期に気付き苦悩していたことは注目すべきことである（少し若い夏目漱石はさらに鋭くこの問題に関わり続けたのであるが）。

いま、日本文化（伝統）と欧米文化（近代化）とをともに包みこむ新しい価値観（思想）の創造が待たれている。（少し飛躍するかも知れないが）筆者としては、この創造される新しい思想としては「生命の本質から、人類の文明、

宇宙の真理までも包みこみ，科学も哲学も宗教もすべて共通の言葉で語られる「生命的宇宙観」とでもよべるようなもの」を夢想している。

参考論文ならびに図書

- 1) 高木兼寛. 裏屋ノ建設ハ衛生上及經濟上ニ害アリ. 大日本私立衛生会雑誌 1884; 18: 15-9.
東京衛生事務の拡張ハ市区ノ改正ヲ要ス. 大日本私立衛生会雑誌 1885; 20: 4-9.
- 2) 森林太郎. 市区改正ハ果シテ衛生上ノ問題ニ非サルカ. 東京医事新誌 1889; 562: 6-10, 563: 50-2, 564: 81-3, 565: 117-9, 566: 153-5, 567: 194-8.
- 3) 鷗外全集. 第28巻. 東京: 岩波書店, 1974.
- 4) 小堀桂一郎. 若き日の森鷗外. 東京: 東京大学出版会, 1969.
- 5) 伊達一男. 医師としての森鷗外. 東京: 續文堂, 1981.
続・医師としての森鷗外. 東京: 續文堂, 1989.
- 6) 宮本 忍. 森鷗外の医学思想. 東京: 勁草書房, 1979.
- 7) 磯田光一. 鷗外の都市計画論. 国文学 1982. 27: 58-64.
- 8) 丸山 博. 森鷗外と衛生学. 東京: 勁草書房, 1984.
- 9) 竹村 望. 高木兼寛と森鷗外. 東京: 東京慈恵会医科大学公衆衛生学教室, 1987.
- 10) 松田 誠. 脚気論争にみる高木兼寛と森鷗外の医学思想. 慈恵医大誌 1991; 106: 387-96.
- 11) 東 秀紀. 二つの東京物語. 東京: 講談社, 1994.
- 12) 加藤周一. 鷗外, 茂吉, 柰太郎. 東京: NHK 出版, 1995.